



「きゃべつの会」は京都市下京区・南区にお住まいのがん患者さん、ご家族がお茶を飲みながら交流し生きる力を取り戻す「地域の患者サロン」（下京西部医師会主催）です

寄稿



武田病院呼吸器内科
呼吸器センター 呼吸器内科 部長
臨床研修部部長

認知症は皆様が最も心配している病気の一つだと思います。
高齢化が進む日本では、現在約 600 万人、高齢者の 6 人に一人が何らかの認知症を有すると推測されています。
入院患者さん、家族の方も入院中に認知症が悪化しないか、せん妄がでないかなど不安を感じる方も多いと思います。
武田病院では今回、寄稿して頂いた認知症看護認定看護師 西塚さんをはじめ多職種で病棟をラウンドし、認知症患者さんが安心して適切な医療、療養ができるようにサポートしています。がん患者さんも含めた認知症のない方も不眠や不安でストレスを抱えています。そんな方も早期から対応されています。西塚さんの人柄がにじみ出ている文章と思います。是非参考にしてください。

武田病院呼吸器内科 永田 一洋

新年度を迎えた 4 月の半ば、職場の同僚看護師から今回の投稿について依頼を受けました。初めて聞く「きゃべつの会」という名前に親しみを感じ、どのような会であるのか説明を受けました。地域のがん患者さんご家族の交流サロンであること、また人の物事に対する考え方、受け取り方の多様性を否定せず、尊重した会を目指していること、恥ずかしながら私自身初めてその存在を知り、とても有意義な会であると感じ、医療職者の端くれとして少しでもお役に立てるのならと快諾させていただきました。

この場をお借りして少し自己紹介をいたします。私は三重県の山奥の小さな田舎町で生まれ育ちました。ちょうど 30 年前の春、大学入学で初めて京都の地に来ました。初めて降り立った今とは全く景観の異なる京都駅の駅舎を今でも鮮明に覚えています。大きな期待と不安そして緊張を胸に、これからここで一人、生活していくこと自体が楽しみで仕方なかった事を思い出します。当時の私は学業には全く興味が持てず、クラブ活動にのめり込む貧乏学生でした。柔道部に所属し非常に大食漢で、毎日の食事代のためにアルバイトをしているような状態でした。そんな私の胃袋をいつも満たしてくれたのは、中央市場近



武田病院で認知症看護認定看護師として勤務している西塚さん



お願いします

今回の会報誌の担当は
武田病院です

【友だち登録にはLINE アプリが必要です】

- ①スマートフォン等でQRコードを讀取ってください。
- ② ID検索LINE アプリで「友だち追加」「ID検索」で「@903NUYTA」を入力してください



ID: @903NUYTA

発行:一般社団法人下京西部医師会

〒601-8452 京都市南区唐橋
堂ノ前町15-9 エステート南ビル301
☎075-693-3900 ㊟075-693-3911



くにあった「ちゃんこ屋」でした。ワンコインでお腹一杯に満たしてくれるその定食屋に毎日のように通い続けたのは言うまでもありません。大学を出て就職した後も、その味を思い出す度に足を運んでいました。しかし、時代の流れでしょうか、7年前の春その店は閉店されてしまいました。今その場所は無機質なコインパーキングになってしまっており、当時の面影はもう有りません。

その後、私は縁があって看護師免許を取得し2018年より「認知症看護認定看護師」として病院に勤務しています。超高齢社会の現在、高齢者の約5～6人に1人が認知症であると言われていています。アルツハイマー型認知症では、およそ40歳代からβアミロイド

という不純物が脳内に溜り始め、20～40年後に認知症を発症します。そしてその多くは記憶力が低下してしまい新しいことが覚えられず、進行すると徐々に記憶が曖昧となり、昔の記憶や過去と現在の区別が曖昧となります。残念ながらいまだ根治できる決定的な治療法や薬は無く、新薬の開発をはじめ様々な進行の抑止を目的とした療法の研究・開発が行われています。

認知症でしばしばテレビや新聞などで取り上げられる大きな問題として「徘徊」があります。徘徊中の高齢者がそのまま行方不明となったり、また、線路内に立ち入り不幸にも走行中の電車と接触し亡くなられたなど、新聞やニュース等で耳にされたこともあると思います。私自身多くの介護者家族から「徘徊」に関する相談を受けます。「もうとっくに仕事なんてしていないのに、夜中になると仕事に行くの外に出ていく」「夕方になるとソワソワと落ち着かなくなり、外に出ていく」など介護者や家族を疲弊させる「問題行動」として扱われているのが現状です。そのような相談を受けた時、私は必ず「ご本人の気持ち」の想像を一番に行います。家族さん介護者さんと一緒に、外に行こうとしている認知症のご本人の気持ちを少しでも理解することを行っています。一見すると徘徊は確かに無駄で意味のない「問題行動」に映るかもしれませんが、



何かを探していたり、何かを求めているのかもしれませんが。認知症によって過去に戻り、過去に生活していると感じているご本人は、ひょっとすると昔の京都駅の駅舎や今はもうないちゃんこ屋を探し歩いているのかも知れません。

時代の変化は京都の街も少しずつ変化させています。私を知るたかだか30年の間でも京都駅をはじめ、蹴上を走る路面電車が無くなったりと景観は大きく変化しました。しかしそこに生活する人々の気持ちや心は変わることはありません。多様性を尊重したきゃべつの会の活動のように、認知症高齢者の気持ちにも理解のある地域であって欲しいと切に願います。



武田病院 認知症看護認定看護師 西塚秀明

今回ご縁あってきゃべつの会にご協力いただきました。